銀臺遺事

下

又B
3153
2

文6
3153
2

水戸藩
山氏蔵

拙齋先生手鑑

銀臺遺事　秋

一

君常ハ　大樹の御許伐数しなふる事世ふ哉ゝ新妻佳
節ハ云ふ及ひ月ゝの慶賀東叡三徳両山代　大廟詣
でゝと数十年間を怠ゝたまらひ出ゝたる　有徳の乃
御言葉とたゝ山海まもゝる事ゝ多ふ給てハ
有廟ハ殆ぢ拝しつゝたるなゝ　はるぢ宮ふる事
ゝ多ゝ

一

若く御ましまゝ比よりゝ文学を好せ給ひ書一籍伐きさ
けなゝ狩ゝ出ふふ又もゝ毛日毎ゝ朝の御膳
洗て也又しを書を御らん有まゝ月ゝ六度の倉讀

ゆゑて近頃の人々とたはぶれて後学ふ所多し
みて社を甲斐もゆく迎下見と云る一度も為りの所
されハ御一代の書後有り書籍使史子集所る巻ふ
及ハ星平小論語詩經古理左傳漢書抔を保這しあ
まこと後ふ若今日使るあるハ又日とかへて六夜
九数找満てあ星書の雑俗找皆考へて手ほう
書加ふ今と文庫み手保の残り多書を数ふ所
有とる人

一 種書とるみふる抔ハ保ハ仮ふ事ふ所
小説くの書とる以ふ猥ふ多ふ抔ふ上ふ

ヒふ又ふて巻の次第を乱さぬ積ちれしふ近頃の
名夜閑くも低ゆ所ふ取遠へさうし

一 詩を始て他をふ遺行数巻有乗洋集も卿のセ
星御年若く御まも比服部元喬ふ野平ふ抔ふて
詩学及ゆき此人ふとハ先生くと云るみふ抔唐
ふハ常元の文ふ九例ふやと見へ抔ふ元喬ふ詩の
ふゆて美のふも元斗ふハセ九ハ元ハ増記後序序
迎ハとふて書ふ抔抔有ふ文集ふのセて書く
人の知ふ多なハ今ふ多ふ所ふ事ふ郭と云ても
比ふも世ふ名ふくかふけ乃上ふてふされふ

才いとく老かゞまりてハ世のまじらひも物うしとてひたすら
のかくれにこもりたまひしかと熊府君ハ今世の賢き國主
にて渡らせたまひ老をよく養ひたまへハ兼てより名高く
なりける也只々此殿ゟのこし於絶へたまふて来りたまふ
そうしおかし後も思ひて久しく住みなしこ事問ふ
人もなかりしにあ殿のこはりし世のなミ忘れたまひぬ
まつりさせそ孫の御きなくあつかりたまふ五人乃
枝葉ともへ大輔殿治年君の御節しの紀れとりとも
季をになりて後にハ高士農れ子ともなりのたまふき
卑事ハ娘をよく父にまかせてたまはるなりしとふ君

此許に居たまひあられこてぞくらくみたまへ今ハ姫になりまされ
給り

一 常に御筆をはなたずにして勝てる字を鮮やかに出さん
がたくなりし一巻披雲閣の令集に青天開鎮西と題
したりとて御筆をとふ叶はせたまはん

一 御力強くして武藝ことに抜きに習熟しなかふよう弓馬稽古させ
たまへりまたし御おもてく比御弓馬父雲雲院殿より附き置
たまひける士に木東輿右衛門と云者ありてかけし竹林院の射
藝に達しけりしかハ君十年頃より召されて是と云子にたまふ
漸々せすみともしるしとてなさせくれ元文五年の比此輿右衛門

よ常ふ不あ〜て誠と祥し紀後州よ伯ゑ〜〜しらバ古仮
年年の名はとおし〜この〜ひまて逢まての志ゑ物ゑみよ
身毛の祖をし見せくるや迎宮土海中三位と云志をまづ
ういて八寸の的を矢数百五十射まもひるに百四十九
筋中ふて只一筋ぞ仇矢ハ有りとるん神事ふ老後を
帰雲と云ゑ〜常ふ古中と詩〜て感者し〜きく又
常ふハ七寸五厘の弓弦引をひられしを宝ふ後ら
とそおふさ〜〜しを由を附餘ふ之〜たゑバ昭之馬術を
大坪解龍の二流奥儀を極めひし〜世の馬京迎を業し
ゑ志を及ゆ奴除も時〜〜せるん

一猿楽誹諧を好歴ふ〜〜ふいつゑも堪能ゑ〜〜又物産を知
るゑ弦ゑこ名ひる獣艸木のかし〜を抵掌〜〜ゑとバみふ
写し絵ふ也さ節ゑふ虫抜ハ何おゑもひ日ゑ〜〜て変ゑ
形ゑを所望〜〜ゑふ果を蝶よゑる物多ゑき蓋を
曜渕海錯なし部類をゑらて数十巻とやちゑ〜ゑん
さ迎ゑも かゆうのゑふ付て材貴やし〜ゑふハ耶もふ
し或時法度の詩ひまゑ〜まして和語の序よ何多の
るよゑ〜〜しゑバ書を加ゑ〜ゑく好ゑて世是ゑ〜
をゑ〜迎ゑの間よ伴ひ数多の名ゑをとゑ〜ゑ〜ゑ
次の日よゑ〜ゑ戸ゑ〜きのふハ陪ゑ〜ゑ物迎歓ひ入い

たゝ一ぢの俗ゝふおろそかなるゆゑにて寄こゝろ引る迎めて
度格へしる心花をも十二三をてをられしるを心花ハこゝる朱
して金銀とちりをめ色こゝの紐を付て心も及ぬ伝授を
まを君御覧して御心ざしの程ゝ迎使を遣し新く
納戸の棚ゝ重さをめ引一ツを用ひ給ふを後所しき
多求め出ゝへをも心花のゝ名ゝ人あり名ハ世花を出
し三ツ四ツたゞ以を給ふ給ふ今をも伝あるとゝ光光
我をを多を給草木を植さをてを植をとるをなめど
をゝ花と盆とハ好ゝを世ふを多るをゝハ花植物をゝハ盆
ゝ伝授を者を人多ゝと立ゝ是を植ゝ初ふて玉伝

ゆゝ花ゝ弱ゝを人なゝん結樂ゝ多ふふを昭和を皆御内の者ゝを
まつゝを中ふハ堪能を伝ゝ名れをも夫ふをゝて新貴家
男者ハ一人もなゝゝ只文武の業を勤ふ者ハ御覧
をもゝく思貴多ゝゝゝるをすゝいへるぐめし

一ゝ君土木を好ゝを多ふを酔を御ゝまゝゝ今を一ツ二ツを上ツ
て記を伝内ふみのといへるハ方六七里斗の萱野多ゝ昔
をゝを今ゝの連武花理ゝを東西ゝ名を並へたゝ抔ハの人
ハ云伝へゝを殿京勤ふをいつをを野を行ゝひをふゝ
多ゝ多るを止めをふへき者をゝ名れハ世倉と云あゝ
ゝ昔ゝ旅殺伐儲をゝゝゝゝをを御覧して御多

一つの為に民を救はして此殿建立ありし御恩も有難き仕業なりき
に移りまゐらせたんにハ芝原の上にて手足をのべしとぞ宝暦四年
名残も能く御座らる本府の屋形の東西に三階の作り
重ねたる楼ありて遠望もすぐれ能りしを不用のものなる
とて同六年に取毀ちしなり又熊府より一里斗隔て
水前寺村と云所に成趣園とて地京に実に似せてつくる
荘あり砌より清き泉涌出て殊に広き渡りとなり
船をもうかべむかふには富士の形ちに芝山築草なんどしつらへ
此國の中にハ又もなき所なり君も此京師とハ殊に意
をれ政事のいとまにハ是に遊ばれ気韻の花を

箱根の山の彼方を御らんじしくも我おちかたにはいとあ
らん杯仰られしと承れバ久しく思ひし名ハ実にはい
かにもなりけるかと実感ぐりハ似りもみてまぬべう覚え
なるに思ひの外昔よりはりけり広大別殿皆古びて
只に醉月亭迚卿なる草亭の一字有けるのこそ殊さ
まで入りそれをとれの上におかしく作り出る所をハ大ぶ
ござらまししかバ凡下心にも見ても浅ましく覚えて
なる足に付ケてもおもひ出る事多かりき扨一とせ東武へ向の
道に江州醒ケ井に宿せられしに大野某と云近習の
士今宵の御宿のいぶせさに何迚かくる所にハなんどいん

と云ふを聞しるさふふ心ゝ此れをべて人も衣食住の三ツさく
足ぬ事ハ其上を願ふハ皆おごりなり衣も宝墨と凌き
食ハ飢を止メ居ふるを面毒ふぬ事さる能ゞこあれハ
足ぬ事を人ら貴の家もそれよハ俗ゝ有何いふやく心
べ紀免ふも角ふも人ハおごり我制をべきるなり能ゝ心
得べしとちをめふ御ゝて御ゝ事ハ
べふも峻所宇墻の御ゝ所なるくしなり
一をへて國主たるへき御ゝ方の表ふふハ御用むる重紙珠ふ
として借りしあふへうるなる此殿の有紙社ふ
分なり殿主ハ浪をし引多紙をもてくしもるの保ふ

を敷て浪布を用ふる桐平なんと云ふよハ雪ふ国役ふ
むとを所ふるハ表の多なる家ハ何の用もふし連條
竹と間遠ふ井せふ事てふ客殿の柱ふんと一昂ふ紀材と
撰び用ふへしとを志ふ紙少しをて只堅ふんん
事を忘ふへしふ仕の京ゝ御ゝんるを忘ふハふふぬ
多なり連を撰歩あゝ事ふくしごの下拓御し不用の
ふあれハ桐を志つふるもおゝしとしつふのふなふ志
めんとなり
一寺院の御服ハ京師の景報ふまて撰て京とをる定ふ
まゝを其の御時次の品を第ゝ比べきよゝ紙命ぞふ

君事ハ油木作と云ものゝ御事をなし御病さへ付ぬ時ハ
人と詩をして楽に暮すの修業なんと云れと尊く覚え
も始付ハ法をたゝくと云れん

一或時長五郎御用ニ紀州江戸ニ三人伴ひ居のゆ
荘子遊びなしゝ小伯の別るを拝み相を退てぎやう
くしゝゆくゝ小君ハ例の二ふるゝしゝ虎後の去れいう
ぐハせん ゆゑ云合れそれ 係ませんをへふくてそ伝
年ゝをてゝゝ君ハ嵐に恥いぬふ御意色ゆゝ拝
て稀人達も別るゝ云いくしてゆゝゆひよき夕さう
場ゝものゆふ道ゆゝを伝を云る事を人達の御とて

明ゝまて味ひよき和たゝゝてをるゝ今ゝ後を明ゆふ
事年と止めるゝ我を人をゆの子数多持ていへゝ拝
のゆふ奏を退てゝ拝を心よく扶持を付ゝんめをと宣ひ
ゆ世教ひのゆ者ゝふを池の法度達此度ハ見
年ゆゝて場ゝものひてそ者を用人杯を召ていハ汝ゆも
能ゆゝひへ九後度新社中されつゝかくゝを始るまれ
つゝ見ゆん賢人と云和ゆゝん杯宣ふいつをゆをなう
ゝと拝ゆゝて足年の扶を此度を先生教文ゆゝく
ゆゝ加ゝ使き用ひゆふ御方ニゆゝ記

一豊ふの一ヶ月の料を兼く定をて芸を料をゆゝ附を

客人招請抔とも皆〳〵止めさせられ倹約〳〵なれたるの
ところへぬ振よかしなつて
一或時大酒殿清華君の方にて御酒まいりセ名是ハ能酒な
ほ者よ是年ハ三年ハ過ぎ名みやいひ名人共具上三三種のさうか
ものとれ酒ハ三ハ保増するべし〳〵寺殿ハ加てもよ
はきなり〳〵る義ハ少て数歌うたへら日〳〵例しと宣ひ
たゞ〳〵是て去ふうおとハ鷹をも好こなりの〇ハ是程の
事ハ急〳〵てもまるんゝ我も鷹の費〳〵をあれハと宣
ひし
一東都御年向の祝よても有久或宿て夜よりて例の祝

よ御酒年をもふいてゝ遠ひ久料理人調味よ用
ゆる九年酒と年をもれても色こふの作もかしをもうをハ
近ものよ移てなく調味ものの上ハ酒をきふるをハ初て
をもとをたゝ〳〵古ぬ色ハ変ハ是ハ料理人の南
者大きよ驚き御酒方支配と共よ目と目を見合ものこ
ものうゝ〳〵ものく居て元次の長をして頭ひ久日)ハいやとよ
ものをしるハいつをの酒と社是〳〵(つを)と宣ひし
一江戸まて雨の降つる日発城南〳〵まやく〳〵小御傘よ年
是名名者語りて傘の孔と御首よ折あてゝうて城まし
くなるゝ〳〵伏沢御ものあよ出てを能の次第よ付御傘の

去をいとゞハ申付ハ申ハ時刻おくれしうと笑ひ申候ハ今日ハ左よりもちゝゝみ社と宣ひ申ハ書地ハて調度ハらし下市ゝゝしゝゝ笑ひて調度と云こと折板セゝゝハ御身色いとハあんと脈近の去おりゝゝ由よれハ中ゝ品ハ病ひゝる下辺ハ怪ふ也ゝ中ゝ

一事厳御母海ハ細井文三市九郎と云ゝ去御手ゝ有セ

ゝゝ信ゝゝ藍より出るとハ云ゝ或時ハ治保卿此名

ハ元ゝゝるゝを去ゝ言セ申ふ俗ゝゝ中ゝ信ゝ御ゝ

那字ゝゝ細川家
事ゝゝて小姓ア
ゝゝ云ゝ荷と
書セゝゝる本書
の況ハ況あゝ
大概ハ正云

石の頭を書吳ゝ（ゝゝと云ゝ）ゝ宣ひ也ゝゝれゝと
辞退ゝゝゝ（ゝゝ）ゝゝ去ゝハ（ゝ）ゝ御里ゝゝゝゝハ云郷
事ゝ潤筆ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
有ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ

一寸陰をおしむと云ゝ文常ゝ宣ひ皆ゝゝ徒ゝゝ御ゝ
ゝゝ御齢ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
書を讀ゝ習ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぬるハ宿者なる程の者なれ皆己が業となり
となん
一近士の者なれども彼の師匠を学ぶ人杯命しらる時生質さ
ほるを速く歎し程なく今より年々杯ヤセバ実さ社
旦ふらめされども己こそ学ひ人あり一切のものさ
とるべきなるべし人十度セバ己る度をとい（ふ理を
心ひて者なり程なく和ようを怠らをかまるく力ぬ
今六十ヨ位なりて一つとして通たるものハ無也程
僅の者なきまを通て世ハ行ん（ほるなり学ハ
何をハなりさんに代るをたたなるまてせきん者ハに

くさけるなりと者こさとるをふされハ眼近の者れ年比の程
もいとで法義を学ぬ或時何事なる仕事の者ヨ梳の職
を命ぜるなりなるに者えなり不堪なり程ハ商近数な
ヨ及ぬるも免し一日の用職の物刷をハ急く
そつく色ヨ日こヨ数なるふ一日の中ふをゆるき又を
そけ杯なれば等度も者ヨゆるせ（ハ或者何迚加ヨ
のこ命なるふ程能の者の口ヨを程れ変なれハ
不堪なるされば社会こそ梳を比べて者者ハ和毎ヨ
仕事なるよきそと宮ひし後ヨハ果してかこふ仕ふ
まつたく化整ハ不堪の者ヨ待セたるん下物の者迚

を心地よくハしく覚ゆるに習ひなるゝときハきめじて出くるかく
斗らせ給ふ御心ざしの内ハ万事は世ぬ事迄心ひ指まし
給ふしを若衆れまぜとし示しなふ御心あり度とはり
かくくと存し

一 いまこ幼稚の御時より手習しなれ日々きた拵ハいとふ
常世にならひてハ書をもひろげるからまして草子に寄りて暗し
まとろこむふのことなり馬にのるふへき日限なとハ学の程
なり繁くして叶ハされハたゞてもちゐて御申ふ学ぶなれへて
学びなかふ中ハ要之習熟しなひまゝこと此より節倹ハ古人
の教と云る事を深く執しなれしと存らん

一 下賤の者を指く我と唱る事いやしき仕業なる者の詞なれ
とも今ハ庶人に限き御方の人とても大かた宮也
ぬるに此君を始め初ふとした名を唱なふ是
まゝ初秋山主殿ゝ我とハ自らを唱ふ詞にて人を指へき
詞に非ると諫め申しと生涯むるものなりしと存し

一 馬を好らせ給ふ事世子様より草かい口取の摂もとまり手に知
ろしさせれとも筏足なともとめぜで末々まで宮ひなるハ
家人ごゝしも能くさせバ研き入ぬる馬なれども生質へよる様の
業を生るものなり家人抔なら八筏足も宜なりしとさ
せハ我をもるの程くに従ひて性分を害さるんるものゝ志

とも)ハ高の居処ハたまで出られと代料二十匁まで つる
とハ求めぬハさ(ら)ぬ(ら)とも皆と思色おゝ(ゝ)かゝき宮や人
とを付ふゝを夫この黒豆の種をたくさんせ迄ゝ御
心能拙ふをおよぐるなるべし

一一ト年代内柳れと云ふよう出ゝるを以て各よ屋て結う
愛しなゝ東年面よ引せゝ迄るよ川渡を不ふて拭きう
いせゝぶる役ゝ取数多ゝ折寄りて色角とゝ迄れのゝ
君御覧して初めよ思くゝれるせハよ仕ゝるものそ拭
こ返りゝと御自ゝ入れゝせ申ひぬ迄ハ寄りくゝと出てゝ居
ゝる業までいつゝゝものひぬゝるゝんと人皆驚きはし

一都證院大婦人ゝ紀州大納言宗直卿の御女て後ゝ
隆徳院殿ゝ嫁しゝふ君の御養母ふしてけゝをゝふ
御書筆ハ同ゝ様のゝまゝくゝれとゝ教ひ仕ふまつり
ゝふゝ誠の御母ゝのゝ如し世ゝ迄ゝ御ゝ年ハ六十の比
ゝ御腹の時と年ゝせゝゝ時ハ腹を刻てけゝとれ
除小豆と云紀伊国ゝ話て口ふし合ゝせ拭ゝ彩られゝ
日と使て味ひ変ゝれとゝん賀ゝハ時二ッ年ゝせゝ迄んよ
ゝ先四ッかくのゝく志つゝい二ッ代ゝ拭ゝて江戸ハ第
せゝ花拭のもて差ん日数を年ゝて拭ゝ二ッを調まさ

さてうやくまあ度てもとさうに石豆大夫人より給し
ゆふさいくまして旦夕味噌のそこ掃もやすると恐る
兼きひ心まゆふるに一ト年例のごく試こゆひ客より
配膳のさよ向ひゆひて豆よりめ小豆をいくまるで
と問るおりやしより出るさ料理せ者よ二人とせ中せ
らるふいつも接ゐとそ者ふそやとゆ上ゆば急御膳色変
里何迚さる奇怪のふるまいしつるそやそ見小豆ハ五穀
の数多に見て天の人とまらふ要和るに先ると使よるて
接ゐ業に接て天くつのるゆ御といかをゆくいつまる
き倉思陪ゆ見ハ中ゆ何ゆやに十九月人を初ゆう

汗とふぎう畏に去うに依しを洗さるゆ見ハ座上の用
人ゆ接くくに迚それ程厳ゆまるみてハいま君の御拳
ふて元にをゆふゆのくるよ乙しるれゆれハ下高れふ
ゆつくゆうくうくるいくん若れまゆよ食らくくんハ
ゆて自作ゆ迚清浄るんふよ細もるそれひるんず
とゆやくゆハいやとよ汝ゆ左接よよしら元ゆ為見と
人の長料よ見人よ稼しる清浄やあるかふるゆ汝
ゆ見大よ心ゆ遠るくとて保ゆ意色悪くるゆ十上し
月人の御座と法らくせゆくハ席上いつまし閉口先上
ハ四ゆゆ元ゆ者ゆく不のくくしめにそ小豆接し

去れば夜惜み初めよりとなく〳〵ハ三度入て
皆〻門童〻を呼てみるに七日斗りて開く御
ゆり茶〻〻常ハ仏餞の中ハ仏のてあやまちセし
事を恐れ御〻なれ御〻答めのふるまハ或
時ハ一族の人伯父母を呼て御餞を付く一名を人
を移て御〻ゝ配餞の者ハ是を人てまるゝ
中されを思ひ〻ハ以ハ外ハ之を来よるく
用ひられよあらハ人ハ不使
なくと宣ひ又昔より毎の御米を稲の種ハ
ゆて國中より貢ぎ捧るゝ御下ハ餞とる

ゆ人ハ只昔の貢のうちを能き年ハ下ハ命
しられ又或時朝夕の御餞ハ白き砂石の交
るのゆゑれをいろまいぬ餞ハ人を見れ
すを信を〻に配餞の者の目をもあるセし
て云〻ハ小石を御袖ハ入らまく知者ゝ小御餞の
る者ハ扱ふ者毎に御袖の底ハ砂石のゆるゆ社
あやしく思ひ御餞ハ付く御餞ハ能く心付て視
入て初て〻思ひ者ハ来数を民の辛苦ふ
るの中の味を深く知ハ一粒ゝ故一粒ゝ徒
ゆるを思ひ惜み身ふ或時御膳ハ来て味ハ為て

かゝしまいりてなるよ打うち一二粒ゝ地よ六月ゝ日ゝ天地
泥助と云ふ近の士を立てしてゝ食せるを御覧し
て是御蔵あり先べて米穀の人の口に入るゝ斗か
民の幸福と積らん佛説よりも元生の恩と云ふ
らせんハあるべゝ我領分ゝ人も我身ハ下粒
の米も出で来ぬ夫ゝ他ゝ者ゝ請ゝ来ゝ
役人ゝ人ゝ者ゝ他ゝ者ゝ有ゝ者ゝ有ゝ者ゝ
他ゝ者ゝ有ゝ者ゝ有ゝ者ゝ有ゝ者ゝ有ゝ者ゝ
ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ

ふなるハ是刈取まの恩なるハヤ五月ゝ日ゝ天地の間
ゝ有難ゝ者ゝ此ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ゝ者ゝ誠ゝ神妙ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ

一

ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ

より蔬菜をとりまつりて又寺（代拜迚御内の者を使ひ
まして）にも其の旨を申さるゝ筆の勢を断ず
詰社の代参に参り初の程なれば）と申す者し
ゐられて後まつていちじるしく叩かれ婦女房
どもは御成御心やと問ふに女の身にて
後に物語りをんを使ふるれば代を事をうされを
心中を自ら相みを分ひとかをるといらひの
ゐるを聴昔より家を用人抔小者よまゝ（身れ御を
使ふ賢中のる式ゐるを男女をみ川ら接者
すと社中法度と必物よ入てゐるを行て相毎たしく

まゝ）て君臣を御諫ゐ御法ハ必しも詰めゐる名し内
地政の事を主実ゐ（しがハ此氣色と覗ひて計らハセ
ゐひをゐ）

一安永九年秋の頃（西丸より）また都筵大夫（御ゐ
やこ例ゐひ以ゐかゐと申（ゐれハ君大きに怒ゐ事
ゐひ急関東（使者を急ぎを書藥の為自身東都（東
向付度す愁訴しかひ御ゐれよを皆こ旅支度し
て　大樹の御免し伐請ひて使節の発ゐ伐のを
今やくと待ゐひしゐふよゐや神妙日　翌の日加賀さ
ゐすふす当来ゐは君乃御歎き一下ゐるゐ

しまん侍りくのたまてくよりあるの折りの御句に
うく

枯芦の孤くしし寒し夜の雁

くてくしくくまでとし此夫人の中ゟ出さるゟ有明和
五年北北非常のゟれ抵と打続き御用かたんと仕し
かんとす此ゟ写閑ゟ打る（きよあしびいでや主従就
苦とたよとて今年ゟ五年抵ゟ更ゟ俊作て君
北御くくいと初め新しき京このゟ料まと廣中の為
まておし後しくくを数を減やゟる只こ木夫人の御方の
こで新まて後ゟものへこきくゟるゟ木夫人俊ゟハ

少しくたてかゟゟ除ゟ我連を洩ゟ奴（きゟハ並ての抵ゟ減
しゟくと只宮ゟ宮へハ君をいゟこゟゟしゟかくゟを御旨
ゟ侍ゟゟゟかくて安永二年のゟゟをゟしゟハ君乃
御使ゟくゟ堀平左衛門と木夫人の許（第ゟせられて侍
侍ゟゟゟゟくゟ五年の調ゟそゟ此年の言ゟハ通し
ゟゟへきゟゟと侍きハされゟゟ）バ木夫人ゟ腰臣草理業ゟ
と御使て作所ゟ侍ゟ但此五年の間し風ゟゟの
侍ゟ多くて御作内の貢を豊ゟゟと侍（侍ゟ又ゟり
此郭内就の口九屋形再び作ゟ出れきのふゟゟまゟゟ
御ゟゟを里ぬゟゟ白金の御書ゟを　ゟゟの御ゟ乃

是年よ入るべき御作しゑ段の全てさへ用出段
かゝはふ折ゝ折はどしうされバケ様よ用意有つる
もいくそくなやかゝ折しも分料とむうゝ返しなハ
らんるまぎきるふ人世間の作まて
社作ゝめと事と細ゝよ中さやふ君違ゝ中ゝ古まく
年本屋と年ゝもて当金の新異ゝ有かゝき
御設まていさんりゝハ免角とゝ中ゝハ御ゝ其恐ゝ浅
ゝびゝゝ此度ゝ分料皆返ゝもてハ御母君
地御ゝ中ゝ元の作まてかひゝるハ孝義の作よ遠
ひ真罰の程ゝ折ゝおゝろしくハ曲て御免しと為ゝ

て元の作よ作ゝ度ゝを社なゝと宣ひきハされしゝは
本末人を孝義の二字よ如ゝとゝそゝ分もゝかてと
辞讓の御詞やゝるくおゝ人元御者よ作ゝを返ゝされ
どゝ中才の分料遠完貫分よ中ゝ
さゝをふ又一下年君中孔の御心地迫御旦五るやゝ野ゝひ
拘毎よ御心強ゝく近作れよ宣ふゝし例よ変てある
なゝ如ゝ孔ハ本末ゝ中ゝ古て身よ病ひ付てハ
誰ゝさゝる習ひよハ作ゝ迫ゝ古仕ふ者ゝ中ゝ
今ゝ御心ゝ中ゝ為ゝと為めゝひゝゝハ君大きよ恐ゝ
恐ゝ為ひゝ引ゝて充ゝ大度よゝゝゝひ昔ゝの作よ

ゐるかぶを此ハくゝや御まゐ算も六十よ近く成りもせんとも
小光の叔とおそれうん抵よるん加ふる事也しゝ
自ら若此子此母といへる辛文ゝ合て幾度と拭ふ
一小君も不我内大臣通光の御女まて成りもるふいるる御子
まや御年ゝうよ御まゝ比より御目と仕ることもし抵と
医療し奉ることもなれ仕ともも除しるく後六盲ゝ弟
ゐふれを君願いるく出ゝる御意色表半を
御まゝかいるふの娶遣へなハゝ紀小君又婦徐御
まして御才若くして月日の光りもゝ奴御才せ
なりもるふうへよ君いまゝ御子成りもなるべいるるん女

をも疫と云ゐへと後くいさめ生ゐへハ此十ゝ女房ゝて
此殿よ御世健治年君生ゐ生ゐふ今一人ハかゝんゝて女の
童ゐていとゝ紀なきよう別仕へ生ゐる若の殿よ男子生
れ豪治ゝ号ゐへゝて三年ゝに世と早ふるひき幾ふ
くかゝんも才まうき此二人の御ハ御例をく云ゐる女ハ
更よふ信しを世よかゝふたゝひゝを祿多くたゝて栄よう
と抵めゝ成る習れるゐよ君の此女房も伐抵御ゐひ
御ふ社祖を沿いるゝなるかゝるる業ゐうゝ者生
初の祖を二人の扶持よ金拾ゐゝて御ゝゝ紀御子
生ゐうて八抵加へうゝゝゝ成ゝ世ゝかゝき

一男の御君は　隆徳院殿とぞ申しける
しかるに後の御君紀藏とは御心地悪敷
早ふより引籠てまゐらせられしを
徒に御姉妹を数多御もち給ひ
なびて関東より清源院殿人当國妻鏡殿人の御方まゐ
見るに年をそふるにしたがひ
さらたどなく心ばかりきこゆ
そもそもやとてちかきあひだ君の御歌科をまち給
そもそも彼方是方とけてこもれる者の集りの心ひ

出るにめくると君立ましを祥を奥部主絶ること年ぬるよ
いうよりさきに此なりそもそも君の御位の辺ゝ
ゐるとなる祈ることハ主人煙とおもひなをなるまて
ハおのゝ御ゝ君臣の新ひまそうとくとなるもてふ（きふず
しし御隔ゝく御まゐる大ゝかゝふ新ひなるきされ
バ奥部主七一冨ゝ新ひ者ゝ新ひなるふとに新ひなし
御母ゝ三年君臣東（御首座の往ゝ者ゝ人奥
部主ゝ向ゝ者ゝ新ひおゝの評ゝ主家ゝ者ゝ
て帰ゝて又使ふふゝ人ゝ新ひゝ主絶ゝ
ゝやと御ゝしゝハ奥部主者ゝ御ゝ迎新ゝ

うしろ[illegible]祖父[illegible]く孫宝[illegible]といふ[illegible]
[illegible]君の[illegible]時初て入[illegible]
[illegible]仮[illegible]
御[illegible]弟[illegible]て東都[illegible]府[illegible]
き五年十月[illegible]関東の[illegible]
主の欲き[illegible]
し[illegible]紀藏主[illegible]御心[illegible]君
[illegible]を欲きの[illegible]御[illegible]
き七年九月[illegible]
年[illegible]天明四年二月の比[illegible]
[illegible]清源の御[illegible]

夫より祖父[illegible]寛政六年三月の比かく[illegible]
陸奥の祖父[illegible]人間の諸行とハ[illegible]
[illegible]長[illegible]

銀臺遺事

秋終

銀蔓遺事　冬

一　半張腐樹より出ゆまして名残草を打かゝ事んとて
御供よりひる侍りしを伺ふまゝ走て呉よ急て呉
よと宣ふ上れハ伺候のものゝ為よおろかにくゝつ
くらるゝ事ハ申をはげまぬ忘てかく斗しもおりまれる
べしまゝ分根のゝぐゝせをもをゝ知らんとゝや者ゝ御物の
度毎よ必書方と一位二位ゞ召具とゝ侍る或時室の位
殿ゝ腐るをやゝとゝもそ御ものゝ上そこゝ鶏の者とゝ中者
ゝゝれハ我きよ板網まて元ゝ人とて御留ま然く
思ゝ三ゝ七ゝ八日ゆゝくゝゝる時かゝへゝ書方の上

いく心へ遠しうん腐の匂の拍子矢声と風ら立ちれば
鶯驚きて花さめあるを中御意色損しるふべしと所うと
呑て見るるよりかくと笑とるひ声ハへくさう名和
とと御腐の綱と御さもまれ色ハ人と弁ど笑
ひ真して止ぬ又毛百の夕ざう体をひるふ毛近侍
の名誤て腐の足結るそとさうれハ大くるる声
ふて中こ表ちくもるひ此二条を腐なるる心よかふ
ぐへるるよ拍の名を御意色損る程なるバ三迄ふ
てかしこ腐をもやべ服近の名列毛て考るるふ
ふひるる毛ハ御心主ふくるるを仮薄のるまかく御

意の程ハ大さるるびおりまれハ御代の名れ皆男
脳と忘れくる或時腐近腐と呼へて呼る迄細殿のお
て御代の侍をふ行通ひ御腐よいで於こ退ぬへと呼れ
ハ御侍ハを於こ退ぬへと答名名君間近く源をもひけ問
答をやーを大きふ気しるふ御りきふて笑こお用
ふる

一腐野ふをあてちぐ紀山の麻狩庚原の追る狩ると
きたびの中るくる夫を家の子帝ふれの弟三の達名
馬上の自由の程位を尺侍ハて武ふ小急るるく
しるんとるを狩場無引拍実と勇まりかき如

未年長兵衛ハ家を譲り隠し

一宇佐狩ニ出掛ける時ハ其所の郡代又代官ハ定番し
代官代ハ民を治る職分ゆえ民の事ハ勿論ゆえ
遊猟を慎ひて若職務怠慢ヶ様ハ民の困
と成へしそれ君の御時より世事永く歩る又阿蘇と云
所ハ山ゝつきて狩くらしの民ハ其所の土民とを
手ゝ松さしてきら星乃めく出事しらぬ世成
事小やと所の長サ小間者へハかゝる時ハ君の御恥
さを忘れんとて昔より形付ふ捉て御ゝ
上らハ世ハ上にて為ハ物ハ夜志ぐらを御

なれ民を我物の為ハ牧ハ人ゝ為ハ
牧ハとて皆と返ハ其ハ例の提挑竹ぐらして北海鍛
御ゝく為ハ其ハ為ハ御ハ鍛て北ハ為ハ永くとあらまてう

一御狩の先ハて係ハ百隆事ハし時代ハ御ハ伝ハ云ハ
命かとゝ中ハ世ハ上にて示ハ為ハ世ハ
之ハ上ハ代ハ者ハ下ハ戸ハ代ハ者ハ物ハ一ハ上ハ隆物ハ者ハ
為ハ御ハ為ハ世ハ人ハ為ハ世ハく行ハ人ハ示ハ云ハ
命ハ世ハ御ハ御ハ上ハ為ハ用ハ世ハ下ハ為ハ
世ハ為ハ行ハ為ハ世ハ又ハ隆ハ御ハ行ハ為ハ世ハ
為ハ人ハ世ハ為ハ道ハ為ハ上ハ為ハ五里ハ為ハ六里ハ為ハ又ハ為ハ行

小て俗ゝ申ふ百姓然る山さの事ゝ歟今宵斗ハ
馬ゝをかりもなし申さんと脇近の者共ゝに乗
ひゝ使ゝとも云ふと人しもおかし抵の事ゝ物りやハ抵
の物ゝ多へきぞよとて俗ゝ一夜を過す

一
帝国不破郡幸昌之常ゝ語りあへしハ安永の比ゝ山庫
郡の郡代ゝふまつ里ゝ君をもてなすゝ三宵おり
南ゝて物ゝ申ふ申あるき山庫ハ國府より陽りゝ申ハ
如ゝふる申ハいとも稀なるゝ申ゝ俗ゝ物ゝ申ハ猶更ゝ申なふ
とに幸職務もいと多あるゝ日ハ御免ゝ
と多ゝ日毎ゝ御供ゝ共抵のゝ申ふ人ゝ

名御物語ゝ申ふ御脇たびゝと近習ゝ付て申ゝ
しハ多如あゝし職ゝ申ゝ俗初のゝ申ゝハ御ゝ申ゝて
裁判仕ゝ抵ゝいと稀ゝ行ゝこゝゝ宣ゝ申ゝ武日ゝ十三
郡原と云ふゝ物ゝ申ふ申ゝ加ゝ申ゝ連猿川塚と
申ゝいふゝ申ゝ申ゝ晴ゝ井体ゝいておハせゝ原のあ
ゝ申ゝ何りあゝ申ゝ三ゝ火災ゝ申ゝやゝ申ゝん
連ゝと不審ゝ申ゝ申ゝ後ゝ有ゝ人ゝ事ゝ申ゝ申ゝれハ
近侍の者ゝ行ゝ申ゝ連ゝ幸ゝ事ゝ変ゝ依ゝ御氣
色の程ゝ申ゝ申ゝ付ゝて承ゝて地行ゝ者ゝ程ゝ申ゝて
申ゝ申ゝず土民ゝ細地の申ゝ物ゝ地ゝ物ゝ連山乃

ぬくと積て大を然るて拙は宝近く君後
らをすふとも悼り三日を拙は今日しを叶ふを
事仕出くは拙三日入存は旦八臣写をいまし疎
そなるよ以ると近侍付てかしこまりヤセ
ふ間しを農民ものおのゞ業といとるまん生涯
何のそうりはんすんん連御氣色一き已能うし
去程よ年八幡つゝいてうるゝて年を連近侍の
者をとさふを志地はてとくをひくていとくれ
ばすと宣ひしなをあ日つるくヤ心しんん性よ
ゑ連かゝ移くをさう農主性て誠を御拵をい

拙や食餌八かるのめく住ていとヤ日八くれ八さう八連立
出ぬひくう農主実ふ八事ゝ食セざるしゝ居ヤさんを
食るの能侍をすふ八うの御意色るうれ八かくハヤ
侍るを拙をこよう物を立てたまて八十四五所もやあ
らんづんを従事の間侍をるひ連を八異変のるヤも
ふしと聞しを上八疾立セるふ八くよるとを小臣の
食るの上をとを心しを忘れぬんかく再度るるひし
事心肝よ徹して難をあるを連此君の御為よを
一命を投んるを業出を拙をようを農るん
と笑くつるを泪伐ぬくひるう

此物語を聞て聞たる事のみ多く書
久敬侯のみ物語なれとも故て後
の御内にてハ分物の志ハ書よ君の御ためさる
らるも明くたまく形ふ情を外よ詠てハたゝ
ゆひつるあれハ人をてる志を一言のもと人とな
せめ多ふ重禄厚賞ハ定れふ式を有唯
かりそめの御詞のみ此御情の種あらハ
れ一言乃ち人を失ひそこなひ多ふ
知るへし抑将た人ハ未士を食もそれハ飢う
ともあへて食ふまじきと此物ふ大事の御代よハ御物ハ

の程を此ふ事を心合されし此君の御為ハ
ぐもの如くなるまゝハ誰か死と惜くせざらん
後世の人を此ふ事よく事れこをなてちそうおも

一中略

一宇敬江都（京向の形ふ）とに豊後の内君の仕ふ
能岐と云ふ御所よ居物室の津ふ和泉ふて
夫ふ陸地と所ふ御代の所ハそ海の沖とあて
雖波よ高ふ定ふ安永四年例のかくよ室の湊よ
異ふ山ふ所所の中指揮つふまりる野間文蔵鏡東仁
と云志伝ていつも雖波よ異ふ人へき御代所ハ君所

よおれまうしと白風をとをすおし落らと開しを心
ざしの程ハ神明も感ぜらるれと彩てハいうるあやまち
もやハはんぞんと御心をいくるのふるゝ一さるべず
船頭のかゝ風白まへられてハおれをふとも伊の苦
しかるべき今ようゝ相かまへて能と宝丸氣色とも見
定て船出をべき旨命しかるふまゝ常よ宣ひ給ハ帝
写れの雑説よ波海ぬんよ忘るかの雑風よあひう
むハ毒ト力ふしられ立揖取心と合ヒ力と尽
さは差なくもをゝ命ふ只と船の修理おろそかし
て打そ舵らふ石あんハ自らまゝ福ひなゝ

常ハ心を尽して変と急る命ふ此旨船頭の者ハ
能心得ふしとゝ

一事成の御度の船ハ昔よういさゝと言ふき材を撰て
他ようたゝりの大船の材ハうち住そ多やをゝ活
しきるまゝてや苦ふるゝんと求出さんるさう
なき大事ゝ事ハ常ハ天下ハ求めたまく式合
たる木ふあれハ数百金を投打買ほて石材の用う
偽君此由と聞しを命後れ船をハいくゝ船と
問せのふそれハ二印とゝうぬきて設を補ひ用ひとま
すさゝハ我船をそ定ようゝ迷ひさやをくそ移

を家ゝ材よ一部者を又はやぶもゝ組ゝ人帝法れ乃
祈を皆るゝんとをてよ我を他ゝめけゝでハ法者れを
危きよ京て我一人望をよ指へゝゝんハ何事の心地ゝ
ゝ人恙苦ゆゝてを危ゆゝ(ゝ)ハ今を(ゝ)の指よ徒らよ材
宝と費を國の牧しとなゝるゝんゝ者の所ゝたるゝ(ゝ)
迪夫ゝゝハ御祈の木ゝを帝のきゝふゝるく用しさゝゝ(ゝ)
ゝゝ

一何ゝをてゝゝゝゝんゝ屋ゝんゝをゝるゝ御京動ゝれゝ御旧
の者と手討ゝゝゝふゝゝ君ゝゝゝゝ同ゝ人ゝゝるゝゝ
ゝ面論ゝゝなゝ剥へを法と祈つ我まれつ(ゝ)ハゝゝて

不使よ我ゝゝゝふ屋ゝんゝめ(ゝ)何迪かゝく(ゝ)ハ使(ゝ)所ゝく
法ゝゝゝんゝ足ゝよゝゝ付ゝゝ者れゝゝ我ハハぶゝゝる
ゝめ果代の主人ゝゝれハ義と心して離(ゝ)ゝゝ成ゝし
金ゝよゝゝを胸苦ゝゝよ業ゝゝゝゝよ法とゝゝゝふ
一君代御月代ゝまゝゝ使ゝふゝまゝる者間ゝゝゝまゝて無
ゝも破ゝかゝゝしゝゝ代ゝを者ゝ恐れ入ゝかゝゝゝゝゝゝゝゝ
里ゝを(ゝ)ハ苦ゝかゝゝを月代の底ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
よゝゝ宣しゝ

一以ゝ北の東部年面ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ或石殺ゝゝて主のおのこ昔御先祖三春藩の御

旅銀ハ無ヶ之ゆえ出ル時の御名札を持
使ひ出ス事ゆえ出ル時ハ御うんせんふまふ為ニ
事ハ今世の国を毎の関札と云物ハ長
おとなりを寸法とゝ(法)よとハ姓名ハ名ハ
後を式ハ使きす為ニ東海道ハの宿銀ハ家と
の関札無並へたん時見苦しうるへうハと中志ハ
札ハいやとハかやうの物を先祖より起ル人ハ
らぬよう迎用ハ為ニ使ひ式ハ
御名札ハ後少将と書セハ人す通例ハ
事ハ書ハしらもほこらきるもそそえ

の使ハ書セらるてう

一君御書生の為ハ外ハ人来の使ハ
かきしるとまいりハ為ニ
も別ハ為ニ諸以つる者ハ必ハと為ニ
為ニ上一下年木ハ為ニ
ばいつし者ハ有つる物と
ハハ二者三者ハ者おらまて
使ハ事の物を悟ハらく
為ニ使る為のあるハ専ハ
事ハ使ハ民の業を

そ〻めて志しをしるし

一或日　台命の御使有べきまて疾より礼服かいはくろい
て客殿より出て待れ給ひしかふや対面終て後はちづけ
まいるべきよし宣ひ奥の方へ入給ふて上村松
長重といへる近侍の者召つれ君みも対面をとて受こ
御書状ふあらぐうとおし出ふ迚大席下の申達まてくとと思よ彩色ありし胸
のとうよりふづけとそてうよ打然てうそ打しもや
上使只今なりと告られバあハてゝ御衣服かへて出むと
いふ長重大よろこて近侍の長よいでハちんと斗り

へバ君の世より仰ふて　上使拝領ひ恐ふ辺て色
くもつてん常ハともあ迚今日ハ面てかふ不忠仕出
したんハ身ゆるる御外あ有べうしそうそ難之かこと
ゆふみよといへハ長重仰ふて急者ハ之ハ云まつ
う程なく　上使の門迚つてゆるふや否や長重を
召あれく御書よ年りて迚バよりゆふ拝ふ合こ
ま〻ハ面を危きゆるし　いそうき対ふかふるし
ゆふをめてやしくふ思ひそと宣ひ御衣色光と御ゆう
セ々ふうよ又或時朝出仕ふれハ長重（我々日出
城してゆるさふどこくと迫りて八ッ比まゆるる夫

をよ是に調度をとて命じのふかしこまりて依御出とを
まをすおのゞ法ゐよ戻りをまをすえと云ひしよ仰せ
の事ふて有つるやいかに事くと宣よ失念し
うしゆへをすくしるすくまつり居うを免まや
角まやとする由をや拾銀まつく仕り仰条是に恐
也入るまをうと長をとして今祇長屋へ命じまをる
仰せの事ふてやくをと失念仕ると也入ゐとやとふ
君聞しをれゐ仰のうまて侍つるやまをし忘れうる
ふ忘ふ申しうへゐ仰せをえを依様よと宣ひし
一一年吳服の御殿まて疏鞠の稚ひをえ也和の用ゐを三

まを紀ゆをみをる木細き件まて加ふとをつゝうをやまを
うう者をふ安くを事れをる人に君をを召して此仕様手伝業
殿ふ疏鞠をを事をを召ひふかしこを加ふうるかく
をを召ひつを侯ををれを場ひ大方をまを海をし
ふ仰をふ加ふの足苦しくおゞへい御内の人をを依仕
まをくををふべうもやいをいをんすとやをれ申ゐ君并
うをつをを形を隔をくをきをへをふ御志しを歌合志し
某國負しくをて帝をれををへふ依を技様ゐぞ
加ふ也をびを依様をを左しゐをるふひをををふ申し
ふをを依ゐいで者年をををいをく物を給セ後をを并

存ぜずけるとなんと宣ひしかば中出をして人をぐして初もか
く義侯と成ぬ
一光ようの鷹狩に袖よ革を裁て絶付ぬ
或時 大樹の御鷹目付某と申人ひとりいて
ぬ御の御鷹を狩ハ其ものかゝ動を
れ鷹の狩破をうるとと宣へハ実と賢き御
斗ひるゝ今よりハおのれもかくて付めとて重く知
らる時を誠よるくしく付しとて君御覧しく凡
此ゝ貴へとぶんるるれハ某ハ鉄砲の入たん古き皮
袋の用ゝ之ぬとて付ぬてうちるる人こハ於き

革を求て付ぬとうとうとて西ハ貴ハ中し場ゝ
とく笑壹ゝいもすひよ
一先こ守の御役を一役をる二多釜てかゝきを内業の
能を者ゝ事ゝに君御ゝ石かゝき損ゝたん時ハ
色し角し先ゝ考ようを有之化ん人ハ考ゝらゝき業
多ゝ連一釜ゝよ之ゝ又夜の抱し又を時いとゝ
ゝ夕けの抱ゝまてる中ゝ連役ゝらゝ
一業方役人と之者むゝ
て事ゝ業多ゝ業を役ゝん時ハ茶道抔をる中ゝ
む連ゝれゝ歩ゝ記

一唐土にてハ世の中に多き物ハ水と火とにて火ハ水
ハ水といふ程にひろく妨あるゆゑにそれを多く
きびしく禁ずるなり此の物貴ければ必多きものにて紙心
及べしとて又料紙も多くもとめ用ゐられたれ共
是迄諸国にてもこれ物と色々にて皆々
作ありもやうにうちくの御法度ハおのゝ夫々書
せるゆゑ又小姓役の者帳かどやらぬるゆゑハ其
たちまちと又外行ふさとせかこうとゝ重役初のゆゑハ
皆それ〳〵書とめしし

一宝暦の比より武具茶器のかるんじ其外重宝用ゆ

ゆゑ〳〵と捉しかるに御対しおこそにあるものひしある時
御信ようのいはゆるまつる者れ用心の為とそ初ゆとて
物を仕るゆゑ銀を用ひきやと用ひしくば
其少しの武具の類なれば有て但し夫ゝ用人料
ハ行れハ五ふべしとそ袋の中より一ツの紙を出
しゆふ之を見ハ銀まて作ゆるとぞなりあるゆ
斗入ゆゑ作ゆるハ若くし時より鼻紙袋多ふ
形入ゆとゝ此ゆゑぞれ付居ゆゑあるれと是〳〵ゆ
唐土元来ゆゑ〳〵今あるゆゑ用ゆゑ積ゆゑと
てたびゆるとも和ゝ用ひて拵ゆゑし京ゝ高斗の

拙し徒らよみもまきとなん侍る

一ゆるしまうけしかひなき小ちなれの品さだよりかうむる
用人等彼てをおろそかなる拙者はしひなんず今ハ
加へてまいてをぐやとやきをそらばいやとそれハ仕事例ず
ふとなる彼なんかなら者拙大名ハ好まず拙ハ我者ずて
いなぐくしまうしなん人のをへ行てハ只こと色やうに拙
侍せんつる拙心然む使ともるん彼ように拙ハ拙
品元しるてらばらくをもんハ拙ハ彼の拙なる
と或をを人のやさしをそ実心まて目出度をへとなん
宣ひし

一君御庫ハ入をもひつるうへまてをいの若者元氣に任
を言ふ言てをかしハ御拙制をまうしるを文を一度
を聞く度をを庫を庫をふ只小声ハ和語をゆれハ耳
ハ聞くを迚御目伐芝しかひしハ水戸黄門光圀卿がく
おハせと云者あるいをんなるを也
一或時江府にて（國ノ大ナリト）さる國主の御方へ涙をかひをを日
ハ君正者拙をて仕服迚あるまてハ者れを
むとををひつる祖ふ風什をまを白ひ年をを（ハ志ハし
を用ををのび兼ハ年者さを御をい（迚使と立て陣ふの
外（出ず）（ハ配服の侍量四中さん迚御跡ハ付て事を

と傍近く呼くゆをハ用となんとふを他を今他ハと
仮抗の蓋ハうにいてしうえ人いまゝ仮をとゝ
まゝふべもゝみ仮をそと蓋をして立てうふをぐ
愛を有て産業を生んいまゝ物こゝ作つん迎法を
久て年すべし完賢主の殿をふをまを他かく也
ゆうゝん人ゝのまうけ不真ゝうん也上げ西月ゝう
むを暴物ゝむゝるもやハ物ゝ人ゝ汝ゝ中ゝてゝかゝよ
と称ゝふ命ゝしゝれゝハ命をの仮を斗ひたゝかゝこの
仮を容を此をを仮ゝすゝく有かゝき御使ゝ迎洞をお
とゝゝゝを中ふ物を主をいゝる右次の日を祝の口産形を家

里近智を使いて昨日の町ゝ為てゝふを不心得業ハ
譜代相伝の主を一命をさゝんゝ中ハ云を及ゝ年を況てハ
物の用を立ますゝを此度の御為を注分を重さあ
と達ゝを中物ゝ里と称いゝゝる
一或時柳川の城主ゝあやゝゝ足を出迎訪ひ来ゝふを
ゝゝ部御ゝまゝけふ卯月の比あやハあゝゝん茄子献代ゝ者
迷ゝ宛跡ゝし今祝ゝ世を有ゝゝゝ也ゝゝ人ゝいゝすゝを甚
真ゝゝゝひゝき君ゝゝゝゝひゝを中に今日ゝを之の徳を
て重賞ゝ跡ゝゝゝき物ゝゝゝゝ新く物の世を時ゝ比ハ
價を仁責ゝ暫ゝ日間を種て多ゝゝてゝゝゝを仮

ゝ苦しかるべうされハ唐土和朝ともに求むべうも
さきをゆるしど稀人のもてなしふかき志の程をもて
見つるハそかぎりふれずと兼て墓石の名れよ示し
うゝふれこそ多くハ爭ひなる物とうづんと宣ひ
しとぞ

一又國の菩提ハ妙解寺主あるゝ事なりとなん世ゝ
ゝ花豆腐とこ物と事ゝ者ゝ一條ゆふ物なれハ
下法師京も見とかの日の設の者とこひなるゝ君御覽
しと彼ゝ鄙のらてこ食物ゝ待らゝ巧をて対をい
とゝ物とも賣すゝをうゝ者ゝ出ゝ賣る

まゝゝ御用ゝと言ゝて又はる〳〵詣ゝるゝ井といふ市
と言ゝ物ゝそこの店ゝ法形と云物を待ゝとおゝゝ袋
ゝ入て賣ゝるゝとゝ思ゝ者ゝ内ゝ又ゝ内ゝ又ゝ内ゝ
物ゝふ物と賣ゝ者ゝ於ゝ者ゝ武蔵ゝ米ゝ國の貧ゝ
基ひゝゝと思ひ給ひしとぞ

一同ゝ寺ゝて松洞ゝ遁世者ゝ僧庭の食ゝ物ゝ中世
ゝ豆腐の制ゝ長ゝ〳〵ゝ今程ハ都ゝ者ゝふ物ゝ
言ゝ〳〵ゝ〳〵ゝれハ其ゝ中ゝ〳〵ゝ〳〵ゝれゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ田宅ハ田夫ゝ者ゝ物ゝ社ゝ者ゝ為ゝれと言ひ又或
時の御物語ゝ此國の者ゝ物ゝ〳〵ゝ安き風俗ゝ

（ぬる人の心ばせ種々ふなり彼小松といとこにて
宣しく相泊して新き名よいつく昔博へてひし
祥を新多よ徳者を多くれぞ者のをに心ひかし
をしてるほふ中の今さよ今陰遁乃才を多て
偶御設多くて心肝よめいぼる抱をとて右二ケ條を
あ考

一明和九年二月の火災よ花口屋形四禄て白銀よ多り
使を人々れ北こ子高士之の高とて加多抱る而有る
ふ大補成使を多ひ多或夜君渡り高ひくつ遠く
ふぐさめ連侍ふ人こを御ふよ左て彼ひ名八皆こ辞て
実ひざ迄き君を深く奥よ入ら迄る時御成松の
中の有名堀平左衛門勝名花口ふ馬を被て年れり
近侍を由中ふれバ急御門かこを改めひ保文と云
こさこてを人の名こ年ふれた長年迄こうん
づんよ多し侍ふ名て出よとて御座をこして待ふ
御を有つる上をあふ多人こ息を詰て云てまう
居ふ座を中セなひ長久くして御脇々ふ花
ノ口よ降ふ多ぐて今育勝名年ふ多正出まて
かの読よ云沛ふんゆよれふんん抱よ雑人余こ
そと多を新ふ君のを臣長臣を敬ひふ中ひ

なりしかば、後白河の勅任にあらずして凡三十年ばかりの中さしつ
ぎなりしなり

一紀伊中納言治貞ていこうしかの御所へあり給ひし紀州
より麒麟紀州より鳳凰なりとて市童ども中々もてはやす或時
近侍の者ども申せしは世にいふ諺のいとも果さるる何条紀
州より鳳凰なるべき近比出来ぬ珍きて奇中の技技を
とさへ心得ぬ徒なるよ左中のうきいるるかいと侍
ものしきなるべし連歌の御事も損じぬ

一或時微禄なる近侍の者ども汝等父母有りやと問せ給へ
いふ母を持ていとやさしれいめで度るなりされたれ

ばしき

一未だ侍従にておはしましける頃なりしかば四国の
御中務の御勅と年久しくなりぬれども少将に宣
ふをかしめべらるるやときこえしかばいやとよ未だ御元服の
仕まつらぬ故ふやうに問ひしかば然ハ特任拝官人き方にて
ありけるとなりしきされども年七多く重ねしかば
うハおのはらサ将に任じてまことに未だもりかばい
或は北主中将なりなんと人迎ひくるいかるかと有
しかと中将なりされば宣ハ先規有
りされそと表文指げなへと宣ひしかば

具表文いふ書を以事と関せなハ其の事も以乎數
年勤むる情任に役付役と書せ有へと有なるハ夫ハお
ほしのおそるゝまゝやハ文ね紙にハ尾る書セられまし
気し某に何事の仲第も能く物のみより急ち事る世
の請りも恥しくは加つるハ余さ済る仕てんハ家来が
余もくと立身か様を念ま終して自望せんずる时様と
なほ信し侍る身人於ての古族未をさるゝ事ハ尼大ごと
表文を以て雜付ハいつとも出相まて於にハめと
宣ひし程に其る事ハ止みき
一天明五年御不豫にて重らせ給ひ御危篤も左右より御

まゐらする時御病床の事を愁せて御足手をさすらんとの旨
情なれハ私智倫行しく忽ち近侍丸云あらせつ事丸都
さんとするも免しなハず奈ん忍ひ用ゐよ倫まそし継よ
其儘の事を加へて我こそと御揚さ伺よ目をも見
給めなひ旨ハ如何る其怪の升ひをやしや連以て御筆
色損し於芯猫甫を人あらしませ八れなる上向
其ひいふ甫是見つるよ事のやうてしも連れ書し
如何るゝいふ余る責を退るゝを近侍丸そ旨を心
得まして余よさてもれ動ともれハ如何る余るまいと去る
事れ口おしさよたいへハ俯く吝嗇なる様みて有つる九

ふまえの程をくゝ心を抜きとゞめられハ是迄の公事
ゆゑ領分の民ともは餘死もせざるもの今ハ病よりかれて心
と面々只こゝにて止とゞめとていぶゝセかひし
かく言ひ〳〵九月の末のゆゑ後の十月よりく
迄さをまゝくきあるも此迄ハ此まの民ともゆゑ
とに加セまて朝夕おうとなゝバ眞かよけひるんし

一妙應院殿おさ殿くおりゝまて此関東まて時の執權の
御許へおさ長岡勘解由と云て御物語の序ゆゑ殿様
國用乏くして物多く叶ハ〳〵たらしと宣ひし今程ハた
斗の物とも使ひくて國と豊よ成はるやと問ふ

勘解由謹るさんい今迄も使ぐのひもの仕ぐ國宝負
ゆゑ〳〵何迄ゆゑ有つるやと重く問セるふ勘解由申
ゆゑハ六九いとけふふひなん使ゝ時ハ此ふ後の御節
とも使人とて分るとて家のゆゑ帝国と拔抜て支
ふ四年さ以前ゆゑて何ゆゑ力ゆゑ使ハすゆゑ
ゆハ五拔軍後の為よ拔こくくの用途をゆゑ
と故殿宣ひしゆゑれハ今ゆゑ有つる所人と問セるふ
実よ五拔の内このゆゑ拔をゆゑ殿ゆゑ包まゝ(なく)
たる由殿様ゆゑ存へて拔ゝ時ゆゑてひき実よゆゑ料ハ
今ゆゑ使ゆゑ年ゆゑ迄て減ゆゑ殿ゆゑハ使ゆゑハ拔ゆゑ

勘解由殿へ申けるとなんありし其御時より君の御代に
四世年数三四十年ばかりもやありぬらん其間に新知加
禄と給ひける者又其中君の志給し石余りせ
減の徒ありしとも禄物の数少しばかりて諸国乃
者るには座せざりき。されバ此の扶助の豊かならざり
けるもむべならずや君事を深く心かけ給ひませのひて世に
いみじき聞へ有しくれと御心中にて事行ずと
のみ者にお伺ひける御気色なりし或時儀中代官の者
二役存じけるを役理させて用ひのびけるを見なり
て近侍の者九等族の御方の館りにとて人見苦しく

新く子を習て其仕くやと申をしくハいやとよ家中
の者れが貧しくてうきあらくらん事と宣へハ我れら
其げしかしき扶助に物成りしものひはへと申せしかバ我
れか心に任せぬは連おぼされきもおほしまやして有難
かりし御心なれかなる御心の底を知りまして志どもハ
此君の倹約を苦るしてまで遍下とやらんに近らんと
つくるくも真かお於ばし

一何國かへ有る御年寄き若き諸侯の才学優長ぱし
て其よいとしく偽しまた由と近侍も語りぬひけると申
しそて誠に今の世の俊才なり但し韓非子楽を好み

まゐのあるにてよとゐん
一むら雲城の御帰きに白紙の御書ゑ乃許不海を
おりまていくく御拝みの例とたゞいてかくハと人こい
ぶくゝ乃ハ今日しを営中まく度人をるき御方左道
しゝ乃を御部屋さうてを毎ゝ御ま御清と時勝ゝ
ぬいふゝ乃ゝ先紫束ぬきてとそ御袴の紐と
くく和を今日の御方改をいゝ心ゐゃんと風斗間セ
ゑ部ゑる程ゑゝ乃いゝゝをゃなんつ道ゝゃさを止
へきゑゝ程ハ色みも角みも人をゐさをゑゝ乃へゝゃい
ひゑんすと差へ年ゝきたハいとゝ何ゆゝ御ゐゑを三ゑ

来ゝ程と言へハさゑゑゝ者ゝかゝゝふきこゝさをゑ和ゑ
と一日ゝ我ゝまて乃れハ人ゝをたゝ心ひつゑハかゑゑ乃和例
年ゝハあゝざゝつゑゝゑゑ御ま我を果色されぬゝし迷
御氣色ゑゝゝゝ抑世界のあて成ゑハ志ゝく主て
君の聰明まてをれ程のゑ者さをゑハいとたゆ見ゑ
へきを行まて主(シル)をつゑ御性の程者ゝかゝし御ゑ
ゑゝゝゝゆゝゝおゑゑみてゝゝゆゝくゝゑおゝ人ゝをゑゑゝ見ハ時
ゝ取ゝての御者のゝみゝをあゝゝゝてゝゝの御志おゝゝ
ゝ御羽ゝ出ゝゝゑゑ(ゝ)改のゑ和何ゑゑ見ゝゝ人
一御年たけゝをゑひても夜の後書ハ急ゝを程ゝゝゝ御

火のくげまで八度〻文字を記すもあれども
物を點じまたは蝋燭くなる如き夜ごとに
むハ費の業なりとて木を用しさまの形を作りて
短くなり抜ハ抜きてさしもてをさ抜くるもの抜
抜くくるハ木をを近付のたれさる如き者
て蝋燭数多使ハ費ハ宮ハ中ハ其ハ
しと徒らとなりまてをいくく制しまふ仮初のるの乃
抜るまたは是ハ君のおとを用ひまふ若夜なんるを
とおるるまを一切のおを用を弁ふ（き為るまを）ハ三ヲ大
人の中許まを中ま者て用ゆ（きおを使用ひさんハ

吝嗇なるべ〻只るるんん時ま徒らま費まるるを
倹約とハ云べ〻君の中心主のめくるべハ某ハ仮初
おこ〻しるく云孫布袋のそ〻ま中如なまるべ〻
一君の字を子明らめの中名を紀雄又利治也也
ともは〻世ま紀屋度を熊本度を中き中謙名ハ
幕裏雨とたるまを東都就ノ口の鍛ふ表海楼寶庫
閣有紀藩然本のお中石を隙藩閣投雲閣と號
く南部服南大川和南を実紀の詩明き
一中年若〻〻程を彼方此方ま書牘の往復せを記
うそれら中ま一ツ伐挙て多ふ記を

呈樂山公子

東都分手甚艸〻不能盡懇懃至今瞻望不已矣蓋浹旬而歸敝邑驛路山川悉足觀也唯憾不使足下見之耳九州斗大無足与語者蓋思足下不足也越子聰計已還家矣不知有書疏奉左右者耶為労致意耳蓋足下高誼不隱肺腑告以經國事要而辱有造于不佞也徒之風雅篇什陽春之調幾乎寡和不佞詩債日久矣愧之愧之伊達侯豪氣未除磊落魁偉在百尺樓上白眼見世人真足下之益友而不佞所畏也亦善國士偶仲英觀其典仲英書劉直自持不阿所好祿〻侍輩豈易交乎答書亦悌可善仲英不墜家声可謂南郭先生無子而有子矣獻春朝覲畢工鑑湖臺重臨篠池同顧菱芡葉鴻厂以典觀於賢者之樂烏則亦復愉快如何時暑酷伏惟自玉雪有嗣章昭諒不備

一所著述とそ志ろう部ゑ改道のもの書のみもの仮者
ゑり紀只歴史の中ゑおもしろくかきもとと家
求の標題の振ゑ仏ゑもの有りどいまゑ功徒

ら林八迪名を多ふ付ゐびゐ亦寄と馬八同しき為乃
物ゐしとそを跡を為でて考ゐひし物有是を仮林八
ゐくし行冗録とそ言下ゐいやしき詩を筆のきさと
ゐ考集めひられをも又苦しき物ゐし冗賢人ゐる
又をそゐ林ゐと宣ひをられき

一宝暦九年八月廿日幽斎君百五十回忌ゐ当ゐひられ
バ作事鈴十帝京路ゐ命とそ往昔土佐光興画き給ひ
しゐ新と写さ也新ゐ上とそ有狩職仁親王ゐ幽斎君
の和哥三首の染筆と乞のひ風早三位ゐ雄四も哥ゐど
送てゐふゐ有しこ詩ゐ月情四とゐゐ人ゐゐ迪

めゐひく負らてかく
ゐゐゐ新ゐむしれ為ゐられて袖を涙乃秋花歌
の月

十七夕題百

一御年ゐ為ひて十人の唱和九人ゐ新と中ゐゐ上成ゐ
しられ常ゐゐはゐくにのゐおりゐ年ゐ多ゐ折しを
秋の夜の長ふして明ゐくゐ秋ゐ居ゐ為ゐく
月を詠めゐふゐ小夜風ゐ身ゐみていと昔とおゐ
出ゐひおりゐまして

龍清邸第夜将蘭明月西風獨倚欄華 似水

華東海賦樓同庚亮武昌看昔時高調空歌
罷今也朱絃誰復彈独坐蕭條懐舊處秋来
白髪不堪寒

右懐舊

一天明の五年秋の初めつかた中の比八くやなのこまくらくるもせもひ物之時ゐの音ゆへ
（侍らしらば
ものゝ侍らるゝ侍らはるゝ者なるゝ
侍らひ此てにくゝ何とゝいうぐるゝ之ゆへ（て名れ人こいて心
細ふそお自へ侍ふ元自の古日はまりよりハ侍るも枝ゐ

ものひ大輔殿と和年ゝセを臣れ之ゝ侍らくく改移の
事ゝを移んご侍ゝ今ゝ侍らゝ主ふ

一九皐の鶴を声天よきこえ一室の言ハ應千里と有とふ
里君のなもちゆふ國ハ日の本の中ゝて八筑紫のくてふ
て長きをたち短きを補ひて方三四十里ふとやゝ有ゐん
彼らよいゝきゆへの唐土ゝも及ひ物ゝてめて及石
心侍ゐれ明和八年の比郡士後部侍中ゐる者侍ゝ
ゝて肥前の國ゝ後ゝ有侍らゝ毛沢ゝを用抵
ゐる国ゝ多ゐゝ侍ゝと云ゝ者と唐人ゝ已ゝ旅館へ侍ゝ
ゐゝ中有侍ゐゝ筆く行ゐ人べきゝ中ゝく名れ唐人

なるあるべよ落しびて落魄と云ふ多招代と共の
是て世を自ら きゝ元やうふ粧ひあるしまけるど例
のるれるいつまとそれてようこべる辛色まて黄雑
幹平世昔ものくる若拓ことまそれおのの國の學業
しるくまあう詞ものとうゆきるべしあ称とと
譯者よ博き中名八拓肥後度の賢明ゆきしく重乃
乃とたふとき学校を建ふる拓唐土さもかれ明
おのまて八幸あてそまのの人よ多之自身ん異域う
ゆうてかくと語んよ明の家土産ゝ是ゆきんとぬゝづき、
てまるび度ふ侍ふ程の志皆ゝ孫ゆゝ方ゆのもう

ゞまてゆと方八ゆきうゝ侍しとゐんあしと
拓
一又或年長崎よ来しし宋紫石といふ唐人捧一詩ふ
曰

恭頌
肥後侯徳政五言三十韻并祈
教正之

柱石隆千古　嵩山祝九天　三台呈炳耀
百辟綴班聯　霖降蒼生喜　雲施紫海連
若為詳物望　願得志言詮　肥本名都秀

阿蘇箕尾彊　君才看鳳舉　水潤澆龍眠
閥閲東京著　文章南國傳　書詩垂黼黻
勲業表雲烟　武藝門材威　雕弓世澤綿
八千禪景運　三十正青年　丹篆神人授
藜光大乙然　從容趨講席　左右侍筵廷
端坐惟清情　深更寒闕淵　掄賢皆環瑋
市駿暴奇椎　屢挈珊瑚網　頡抽玳瑁編
慈祥瞻弼教　間注考大全　北極清光被
東華碩望懸　蓬瀛裁衆美　王府領群仙
邦國行壽慮　兵民仰策鞭　便須調鼎鼐

原不同金錢　繁祉添芳版　嘉禾貢甫田
列卿成九叙　思賜日三千　久矣忠誠貴
美哉風土妍　玉堂仍故里　金鑑每新研
御仗邊采近　宣揚拜手專　高階億世並
明府百僚先　喜色盈朝埜　歡声闐陌阡
爭歌陬奥金　永戴
越王賢欝ミ風雲會飄ミ鳳翥翩王朝
崇崎望仁德　慶調鐫

苔溪雲亭宋紫岩謹拜艸

一此君孝子名荃の実子るるるんるもといとひるるて昔或人

国の中のいとしきものどもを世みと共に国のしく梓上
もちまくらめんとて書 使くふるゆゆしくを閉じて
おのるかぶそとさしたるおちうもて行ば系治教よ
ものるんふと世ようこと見人を敷き才の度を
重ねる業ゑくとていろく制しめふらへくハ御意色
まくよるものざうきたうハ四ど賢くちうがてきるゆ
ちとを詩ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ人ををくゆゆゆゆハうるかゆ
漢とまくんるとを立しみゆ日系書集るよ使ゑて
いはまぐめきの真意をちふまて御もうきたるゑ
くこたうるゑ詩をゑ御おそ見みくゆをとうぬ

後考人をうる深く味ひあらん諸賢

文化乙亥秋借大槁順正所蔵本謄写烏順正
嘗借熊藩所蔵本謄写則此本為定本明矣今
世所傳肥後物語多溢美之言且其所記率傳聞
之説莫足信者若此書則熊藩舊老記其所覩記
蓋實録也云雲龍青山人識